

【研究ノート】

アイヌ文化のイラクサの糸づくりについての覚書

笹倉 いる美・西田 香代子

要 旨：北海道立北方民族博物館では、2023 年に西田香代子が講師を務めたアイヌ文化講習会「イラクサの糸づくり」を開催し参加者はエゾイラクサから繊維を取り出す工程を学んだ。

イラクサの糸はアイヌ文化においてさまざまに用いられ、特にサハリンアイヌの草皮衣の素材であることが知られている。

本稿では、イラクサの糸づくりと本州で行われるカラムシの糸づくりとの比較を試み、アイヌの樹皮衣と草皮衣の理解に新たな視点を提示する

キーワード：イラクサ アイヌ文化 テタラペ 草皮衣 カラムシ（苧麻）

1. はじめに

2023 年 9 月 10 日に北海道立北方民族博物館ではアイヌ文化講習会「イラクサの糸づくり」を筆者の一人でありアイヌ文化伝承者の西田香代子を講師に行った。

具体的な内容は、乾燥させたエゾイラクサから繊維（内皮）を取るもので、1 時間半で参加者 1 人が 2 本程度処理することができた。この講習会は前年に開催した、西田を講師とした刺繍講習会時に、参加者の間からイラクサの糸づくりをしてみたいという声が寄せられたため行ったものである。広報する間もなく満員となり、関心の高さがうかがえた。

講習会では糸づくりの工程のなかで、繊維を取り出すところまでとした。実際の糸づくりでは、さらにいくつかの工程を経て糸になる。

糸にしたものは、「縫い糸や弓の弦、衣服など多様な繊維製品に使われていた」（千原 2022 : 340）。サハリンアイヌの五弦琴トンコリの弦にも使われたというのが、阿寒在住のトンコリ製作者兼演奏者によると、音はあまり響かないという。

糸・ひもにする植物性繊維にはオヒョウやシナノキも知られている。北海道立北方民族博物館が所蔵する資料の観察からは、イラクサで作られる糸は、オヒョウやシナノキで作られる糸・ひもと比べると、細く仕上げられている傾向がある。

植物性繊維から作られるアイヌの衣服には、樹皮の繊維から作られる樹皮衣と、草本の繊維から作られる草皮衣がある。この草皮衣の素材がイラクサである。草皮衣は特にサハリンアイヌの衣服とされる（北海道立アイヌ民族文化研究センター 1997 : 12）。佐藤はヨーロッパ、ロシア、国内の博物館や個人が収集した樹皮衣と草皮衣 237 点を整理しており、このうち収集地が明らかな草皮衣 45 点中 44 点がサハリン収集となっている（佐藤 2020 : 225-237）。一方で、北海道教育委員会が行ったサハリンアイヌの衣服調査において、イラクサによる布織りについては記載がなく（北海道教育庁社会教育部文化課編 1987、1988、1989）、同じインフォーマントを 1960 年代に調査した大貫もイラクサの糸による布織りについてはふれていない（大貫 2020）。布製品の流入によるイラクサ製布の需要の低下を勘案しても、1945 年以降のサハリン島からの移住が衣服文化に及ぼした影響が大きかったと推測できる。

北海道のアイヌ文化伝承者である遠山サキはイラクサから糸づくりを行っているが、布織りにはふれていない（佐藤 2018 : 221-222）。西田もエゾイラクサやムカゴイラクサから繊維を取り出し、糸にし、それを用いて木綿衣に刺繍を施しているが、イラクサの糸で布を織ったこと

はない。現在、公益財団法人アイヌ民族文化財団のアイヌ文化活動アドバイザーには約 30 名が「織物」で登録しているが、全員が樹皮衣の織り手と思われる（公益財団法人アイヌ民族文化財団 Web）。イラクサの糸による布織りは北海道でも行われていたが（知里 1957 : 166）、サハリンほど盛んではなかったといえよう。

本研究ノートでは、西田によるイラクサの糸づくりを記録すること、イラクサの糸に関する事柄について整理すること、本州で行われているカラムシの糸づくりとの比較、イラクサの糸から作られた草皮衣が主にサハリンで見られる理由についての若干の考察を行う。

2. 西田のイラクサの糸づくり

西田香代子によるイラクサの糸づくりの工程は次の通りである。なお西田は、イラクサの糸づくりについて、アイヌ文化研究者の藤村久和氏から教えを受けた。

- (1) 立ち枯れたイラクサを収穫し、乾燥させる。
- (2) 乾燥したエゾイラクサの茎の下部に、先を削ってとがらせた箸を差し入れ、そのまま先端まで割く。
- (3) 下部から茎を外側に折り、繊維を取り出す。
- (4) 繊維の一方の先を、ダブルクリップでとめるなどし、屋外に干す。取りきれていない外皮等を両手でたたいたり、風の力をつかって落とす。
- (5) 繊維を細かく割く。
- (6) 2 束（ここでは束というが、繊維 1 本ではないというほどの意味である）の繊維の右束を Z 撚り（撚った繊維を縦に置いたときに、撚りの方向が右上がりに見える）にし、次に左束と S 撚り（撚った繊維を縦に置いたとき、撚りの方向が左上がりに見える）にする。イラクサの糸づくりでは両方の束をそれぞれ Z 撚りにしてから、S 撚りにすることも見られるが、糸が硬くなるからと、西田は右束にしか撚りをかけない。
- (7) 束が短くなったら、次の束を撚りこむ。



写真1 箸でイラクサを割く

エゾイラクサとムカゴイラクサを比較すると、エゾイラクサのほうが太く丈が長く、ムカゴイラクサの糸のほうが繊細である。ムカゴイラクサのほうが丈が短いため、必要な量を収穫することや、糸を績むには時間がかかる。布に織ったときにはムカゴイラクサのほうがしなやかで柔らかく、仕立てた衣服も着心地がよいものと思われるが、この件については確認できていない。

3. イラクサについて

イラクサは種類が多く北海道では、イラクサ科イラクサ属のエゾイラクサ *Urtica platyphylla*、コバノイラクサ *Urtica laetevirens*、ホソバイラクサ *Urtica angustifolia* var. *angustifolia* があり、ムカゴイラクサ属のムカゴイラクサ *Laportea bulbifera*、ミヤマイラクサ *Laportea cuspidata* がみられる（城坂（平林） 2023 : 48-49）。

『樺太植物誌』ではいらくさ科いらくさ属にオホバイラクサ（エゾイラクサ）とホソバイラクサの2種が紹介されている。オホバイラクサの説明では「真皮の繊維は強くして利用の途多し」とある（菅原 1975 : 732）。

イラクサの特徴として棘があげられる。この棘の成分は、人に痛みをもたらす。西田はイラクサを11月に収穫しており、この時期になるとイラクサは立ち枯れ、棘に悩まされることはない。佐藤によるアイヌのイラクサ利用の整理でも、イラクサの収穫は「秋の茎が枯れた頃」としている（佐藤 2018 : 223）。

またオヒョウに比べて繊維の色が白いこともイラクサの特徴である。このためイラクサで織られた布は「白いもの」を意味するテタラペ、あるいはレタラペとよばれることが知られている。「白い」は『アイヌ語方言辞典』では、樺太方言で“tetara”、千島方言も含め他の方言では“retar”である（服部編 1964 : 282）。

糸にする前の繊維でもオヒョウが赤っぽいのに比べると、イラクサの繊維は白い。さらにイラクサは雪晒の工程を経て、より白くなると言われるが、2023年に北海道立北方民族博物館で行った雪晒の実験では、目に見えてわかるほどには白くはならなかった。無論この実験結果が雪晒の効果を否定するものではない。

4. カラムシ（苧麻）との比較

イラクサと同じくイラクサ科の植物にカラムシ（苧麻）*Boehmeria nivea* var. *nipononivea* がある。イラクサ同様、繊維がとられ、布が織られている。現在は福島県の昭和村と沖縄県宮古島が生産地として知られている。

カラムシも品種が多く、植物学的な研究事例は多くはないという（菅家 2018 : 12）。ここでは子細にははらず、広くカラムシとする。

イラクサとカラムシの大きな違いは棘の有無である。カラムシには棘はないため、棘を気にする必要はない。

昭和村での収穫時期の適期は7月下旬とされる（菅家 2018 : 29）。その後の工程は次のとおりである（滝沢 1999 : 23-27）。

- (1) 刈り取ったカラムシを水に漬ける。
- (2) 茎を折って、皮をはぐ。
- (3) はぎとったものを束ねて再び水に漬ける。
- (4) カラムシを板にのせ、金属の道具（北方諸民族の鞣し具に似る）で表皮を取り除く。
この工程を「引き」と呼ぶ。なお沖縄では貝が使われる。
- (5) 引いたカラムシを干す。
- (6) カラムシを割きながらつないで長い糸にする。これを「苧うみ」と呼ぶ。
- (7) 糸車にかけて糸にする。
- (8) 2、3月頃に雪の上に晒す（布に織ってから雪に晒すこともみられる）。

こうして作られたカラムシの糸は、高級繊維として新潟に出荷され、越後上布の材料とされている。

西田のイラクサの糸づくりは 2. で示した通りであるが、アイヌのイラクサの糸づくりでは、「水に漬ける」、「カワシンジュガイの縁で皮をむく」工程が加わることもある（佐藤 2018 : 214-218）。例えば知里は樺太の白浦では、秋に収穫したイラクサの枯れ茎を水に漬けておいて、川真珠貝の殻の縁で荒皮をけずることを記している（知里 1976 : 163）。この二つの工程は、カラムシの糸づくりに共通する。

西田のイラクサの糸づくりの工程でみるように、イラクサを水に漬けずとも、あるいは道具を用いて皮をむかずとも糸を作ることは可能である。カラムシの糸づくりにおいて、「引き」の工程は、「きら」と呼ばれる繊維のつやと輝きに関係している（滝沢 1999 : 26）。イラクサの糸づくりにおいても、貝による皮むきには、作業効率からだけではなく、繊維の質に関する可能性を指摘したい。それとともに、カラムシの糸づくりがイラクサの糸づくりに影響を与えた可能性について後に検討する。

また雪に晒すこともイラクサとカラムシの共通点である。

なお、織りの工程においては、腰機を使うことも共通点である。滝沢は、カラムシ織は、いかに近代化されても腰機以外では織ることができないという（滝沢 1999 : 31）。もっとも宮古島ではカラムシを高機で織っていることから、滝沢がいう「織ることができない」というのは、否定ではなく、腰機で織るものだ、という意味であろう。

5. イラクサの糸と布織りの課題

佐藤は、佐々木の疑問「（アイヌ文化の中で）素材の面からみると、なぜ、広い自生範囲をもち、比較的利用しやすいイラクサではなく、オヒョウのような木本植物の靱皮を繊維としたのか」（佐々木 2001 : 56）を解明することを試み、オヒョウとイラクサの繊維の長さが、労力の差となって、北海道アイヌがオヒョウのような木本植物の靱皮を繊維とした要因であるとす（佐藤 2018 : 225）。なお佐々木は北海道アイヌに限定していない。

また岡村は、「織り材料としての樹皮繊維にオヒョウ、シナノキ、ハルニレなどあるが、織上ると一様にオヒョウの樹皮衣アットゥシと呼ばれる。草本繊維はイラクサの仲間が殆どで、呼名のテタラペ、レタラペ (retarpe) は樹皮繊維に較べて「白い」との意味になる。素材名ではない。樹皮繊維に遅れて使われたことを物語ろう」という（岡村 1993 : 90）。

佐藤は樹皮衣と草皮衣を繊維の長さの違いで比較し、岡村はその名称から先に樹皮衣があり、あとで草皮衣が生じたとする。知里も名称の分析からテタラペが北海道から渡った新しい文化であるとしている（知里 1976 : 163）。

佐藤は北海道アイヌと限定しているので、岡村や知里の言とそのまま合わせることは適当ではないが、岡村が言うように、先に樹皮衣があり、その後草皮衣が生じたのであれば、樹皮衣に比べ労力の多い草皮衣を作るには何らかの理由が必要になろう。

大貫は、樹皮衣が草皮衣より時間がかからないこと（草皮衣のほうが時間がかかる）、イラクサの繊維がオヒョウより丈夫なこと、またテタラペが長老の特権であり（とはいえ、オヒョウの少ないところでは若者も草皮衣を着用していた）、格式が高いことを記す（大貫 2020 : 70-71, 75）。

本田は、松浦武四郎はイラクサのことを「是は則本邦にて云るカラムシなり。七月八月頃山野ニ入て茹取り、翌年ニ到りて是を糸となし織ること也。又厚子より丈夫にして色白し。此ヨタルベに而地細きものは、到而上品也。故ニ直段もまた厚子ニ一倍せり。其織方はアツシと異

ることなし 又此草をもて、巾式寸五六分より三寸位の帯を織るなり。しまりよきもの也」と述べ（松浦 1999 : 465）、「ヨタルベ」（草皮衣）の方が「厚子」（樹皮衣）よりも丈夫であり、価格もはるかに高いとしている、と指摘している（本田 2002 : 10）。

そこでアイヌ文化にとっていくつかの点で価値が高いとされる草皮衣をつくるために、カラムシによる糸づくりの技術が本州から導入された可能性を考えてみたい。

カラムシの糸づくりでは、道具が使われる。それがカワシンジュガイである。イラクサ同様、水に漬けることもカラムシの糸づくりにある工程である。

カラムシの糸づくりでは、「少量ずつ口に加えて右手の爪で繊維を細くさき、さいた糸は唾液で湿し、左手でよりつないで苧桶にいれる。」とある（滝沢 1999 : 27）。樺太庁博物館の館長であった山本利雄が提供した写真（撮影庄子篤）には、サハリンアイヌの女性が口にイラクサをくわえて糸を撚っている写真があり（大貫 2020 : 72）、イラクサとカラムシの糸づくりにおいて共通する項目に、糸よりの際に糸を口でくわえることもいれてよいかもしれない。

なお西鶴はサハリンアイヌがイラクサの皮をはぎ、これを水に漂して白い繊維を作り、木綿を交えて織ったカアツツシ（西鶴は **Ka-attushi** と表記する。ka は糸、attushi は織物と説明）と、イラクサだけで織ったテタラペにわけて紹介している。テタラペの糸は「蓴麻の皮は **Biba**¹ 鳥貝の一片で外皮を去り、繊維を微温湯で洗浄し、屋外の竿にかけて夜露に晒して後充分に乾燥させて糸に絢ふ。糸に絢ふには、繊維を口に啣へ、両手の親指と人差指で口元から前に絢って行き、微温湯に漬けてから屋外で乾し上げる。乾燥した糸は糸巻に巻いて縊り合わせて強靱な糸を造る。縊り合わせた糸は、屋外に約十米の間隔を置いて建てた二木の雁木に掛け渡し、中央に重り石を吊るして縊りを充分にして後糸篋に巻く」と、カアツツシの糸づくりとテタラペの糸づくりに違いがあることを記している（西鶴 1942 : 68-69）。

6. まとめ

本稿ではまず、西田のイラクサの糸づくりについて記録した。前述の講習会には、アイヌ文化伝承に携わる方たちも複数名参加していたが、イラクサの糸づくりは未体験ということで、記録する必要があるためである。

次にイラクサの糸について整理し、カラムシとの比較も行った。筆者の一人である笹倉が、カラムシにも棘があると勘違いしていて、なぜ棘のある 7 月に収穫するのか、秋に立ち枯れて棘のない状態になってから収穫するアイヌのやり方のほうが合理的ではないかと考え、カラムシとイラクサの糸づくりについて調べはじめた。イラクサの糸づくりとカラムシの糸づくりでは共通する点と、共通しない点がある。イラクサの糸づくりの工程においても、道具を使うこともあれば、使わないこともあり、水に浸す工程や、干す時間もさまざまである。

アイヌ文化において、先に樹皮衣があり、のちに草皮衣が作られるようになったことは、先行研究で述べられている。布織りが必ずしも糸づくりと機を一にするわけではないとはいえ、布織りにおいては糸を大量に必要とすることから、織りに伴って糸づくりの方法が確立した部分はあるだろう。樹皮衣も草皮衣も織り機には違いがないようであり（西鶴 1942 : 70）、サハリンでは樹皮布も織られていることから、織り機があったところにイラクサの糸づくりが行われるようになって、イラクサの布が織られるようになったという順であろうか。

草皮衣は北海道からサハリンへ伝わったとされている。しかし北海道で草皮衣が盛んにつくられていたということは確認できず、そのような状態から草皮衣が北海道からサハリンへ伝わったとすることには、さらに検討が必要だろう。

そこで本州のカラムシの糸づくり（布織り）がサハリンに伝わったことを検討してみたが、その場合、経由地となる北海道でイラクサの布織りが盛んにならず、サハリンではよくされたとする理由がみあたらない。イラクサ自体は北海道にも多くみられるので、材料の多寡は問題ではなかっただろう。

これまでの、単に北海道では樹皮衣で、サハリンでは草皮衣が使われたと、アイヌの衣服の地域差について素材の違いだけが言われてきた傾向があり、なぜサハリンでは草皮衣なのか、その理由について述べられることは少なかった。この理由を明らかにするには、樹皮衣と草皮衣を外的要因も含めさまざまな面から詳細に比較する必要がある、素材の検討も含まれる。カラムシからの糸づくり、布織りが北海道、サハリンに伝えられた可能性についても検討を続けたい。

本稿では草皮衣の材料となったイラクサの糸づくりを概観した。今後記録に残るイラクサの処理を実際に行いながら、各工程の意義を確認し、本稿では単に布織りとだけしていた布の織り方や織り機についても検討を加え、アイヌ文化におけるイラクサの糸づくり（布織り）について明らかにしてゆきたいと考える。

謝辞

丁寧に確認を下さり、筆者らが気づかなかった点を指摘くださった査読者に心から感謝申し上げる。なお査読者からは、布織り用のイラクサの糸と、荷縄や刀帯など道具に用いる糸の作り方の系譜が異なる可能性はないのかとの指摘があった。現在この指摘に応えることはできないが、今後イラクサの糸づくりについて研究をすすめるうえでの課題に加えたいと考える。

注

1 Biba はピパともよばれアイヌ語でカワシンジュガイをさす。

参考文献

大貫恵美子

2020 阪口諒（訳）『樺太アイヌ民族誌:その生活と世界観』青土社、東京。

岡村吉右衛門

1993 『アイヌの衣裳』京都書院、京都。

菅家博昭

2018 『苧』農山漁村文化協会、東京。

佐々木利和

2001 『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館、東京。

佐藤雅子

2018 「アイヌの樹皮衣と草皮衣」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:203-227。

2020 「アイヌの衣服:その特徴:樹皮衣と草皮衣の形状と文様から」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:221-255。

城坂（平林）結実

2023 「北海道の繊維植物のはなし」『北方民族の編むと織る』北海道立北方民族博物館、網走、48-55。

菅原繁蔵

1975 『樺太植物誌』2 国書刊行会、東京。

滝沢博之

1999 『会津のカラムシ』 歴史春秋社、会津若松.

千原鴻志

2022 「いらくさ」 関根達人、菊池勇夫、手塚薫、北原モコットウナシ編『アイヌ文化辞典』 吉川弘文館、東京、339-340.

知里真志保

1976 『知里真志保著作集別巻 1』 平凡社、東京.

西鶴定嘉

1974 『樺太アイヌ』 みやま書房、札幌.

服部四郎編

1964 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店、東京.

北海道教育庁社会教育部文化課編

1987 『昭和 61 年度アイヌ衣服調査報告書(4):樺太アイヌが伝承する異文化 1』 北海道教区委員会、札幌.

1988 『昭和 62 年度アイヌ衣服調査報告書(3):樺太アイヌが伝承する衣文化 2』 北海道教育委員会、札幌.

1989 『昭和 63 年度アイヌ衣服調査報告書(4):樺太アイヌが伝承する衣文化 3』 北海道教育委員会、札幌.

本田優子

2002 「近世北海道におけるアットウシの産物化と流通」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』 8:1-40.

松浦武四郎

1999 (秋葉實翻刻・編) 『校訂蝦夷日誌:二編』 北海道出版企画センター、札幌.

Majewicz, Alfred F. ed.

1998 *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski 1 : The Aborigines of Sakhalin.* Mouton de Gruyter : Berlin.

公益財団法人アイヌ民族文化財団 Web

<https://www.ff-ainu1.or.jp/web/application/system/adviser.html> (2023 年 11 月 14 日閲覧)

(ささくら・いるみ／北海道立北方民族博物館)

(にしだ・かよこ／アイヌ文化伝承者)